

②小学校区や自治会等の区域を対象とし、
地域に密着した取組

●本モデル事業で採択された団体の類型化

区分	居場所・交流の場の対象とする主な属性					
	多世代	こども・若者	子育て世代	中高年・高齢者	困難を抱える者	
居場所・交流の場に呼び込む主な仕掛け	体験/学び/遊び		<ul style="list-style-type: none"> •たのつく •地域で子どもを育む会 			
	地域貢献・仕事(役割の創出)	<ul style="list-style-type: none"> •CONNECT •青空プロジェクト •Shien 				
	食の提供	<ul style="list-style-type: none"> •教育支援協会南関東 	<ul style="list-style-type: none"> •アクションタウンラボ 			
	イベント	<ul style="list-style-type: none"> •福岡終活・相続支援センターみらいあん 			<ul style="list-style-type: none"> •地域サロン・さくら 	<ul style="list-style-type: none"> •ハレトケの会
	多様な仕掛け	<ul style="list-style-type: none"> •街の家族 •森ノオト 				

体験／学び／遊び

こどもと大人の地域イベント「たのつくフェス」

任意団体 たのつく（東京都小平市）

●本事業のポイント

- ①こどもと地域に暮らす人々が交流できる居場所をつくる。
- ②仲間とともに遊びを創造する活動を通じて、主体的に生きる力を養う。
- ③こどもと大人のつながりを広げ、地域コミュニティを活性化する。

●キーワード

居場所/こども・若者/
イベント

1 取組の背景と目的

◆対象者が抱える課題

対象地域では、近年宅地開発が進み、子育て世帯間のコミュニティや小学生が放課後に過ごす居場所が不足している。こども同士、地域の大人との交流機会が少なく、こどもの放課後の孤立が生じやすい環境になっており、「集う場所」や「関わるきっかけ」が必要となっている。

◆取組を始めるに至った経緯等

たのつくでは、居場所がなく道路や家の前で集まって遊ぶ子どもたちのために、市の運営する地域センターの1室を定期的に借り、子どもの登録有無にかかわらず、立ち寄った子が誰でも参加できる居場所運営を行っていた。顔見知りの数人の活動から、より広く子どもたちの居場所としての機能を拡張するため、また、地域の放課後の孤立の課題把握とその改善のために本取組を始めることとした。

◆取組の目的

こどもの放課後の居場所づくりをベースにしたイベント開催を通して、地域の中(小学校区)で、孤独孤立リスクのあるこどもを含んだ、こども同士・大人との包摂的な「ゆるやかなつながり」を拡大する。

具体的には、イベントを企画すること、参加することを通して、関わるこどもの人数が浩がり、それを支え見守る大人の参画する人数が増えることを目指す。



イベントの様子

2 取組内容

◆具体的取組内容と特徴

●こどもの居場所をつくる

- ・「たのつく」は、家庭や学校、習い事と異なる子どもの居場所づくりを目指している。技能の習得や数値的評価を求めず、ただそこに居て、好きなことをしてよいという受容と安心感を大切にしている。その上で、こどもたちが自分を表現し、自分たちの居場所を維持・創造することを支援している。

●つながりをつくる

- ・「たのつく」では、「こども同士のつながり」はもちろん、「大人同士のつながり」、「こどもと大人とのつながり」を重視している。共通の活動を通じて、互いに信頼関係を築くことで、日常生活における安心感、悩みやトラブルの相談、こどもの見守り体制づくり等に貢献する。

◆連携先との関わり

- ・多様な地域の大人…保護者に限らず、近隣大学の学生、ピアノ教室の先生、子ども支援のNPOスタッフなど、多様な人材に協力していただいている。多くが、こどもと一緒に過ごす、遊ぶことを通じて活動に参画してくださり、地域の包括的な見守り体制の強化につながっている。
- ・市担当課、地域センター…活動場所に関する相談、調整
- ・社会福祉協議会…地域のセーフティネットに関する情報交換
- ・活動場所の確保が重要となるため、施設使用に関して、市や地域センターとの連携を図り、安定的かつ快適な居場所確保を目指している。
- ・社会福祉協議会へは、子どものセーフティネットとして、子どものSOSなどに関する情報を連携できるように、民生児童委員との接点を持っている。

3 取組の成果

◆地域のゆるやかなつながりの拡大、関係性の向上

- たのつくフェスを通じた、居場所への参加者数 117 名(ユニーク・小学校区全校児童の 2 割程度)、うちそれぞれの孤独孤立に関する困り感表面化している子は 4 名ほど。例：ひとり親家庭、コミュニケーションの課題、帰国子女、私立小学校通学。その他、放課後に孤立しがちな低学年の子どもたちが地域で遊ぶきっかけの場になっている。子どもが子どもを誘い、大人同士の関わりも生まれ、居場所運営への協力もゆるやかに築くことができている。

◆孤立しがちな子を含む地域の子たちのイベントへの参加機会の創出

- たのつくフェス過去 2 回の参加者合計約 110 名、孤立リスクのある子 4 名が運営に関わり子ども同士や大人との関係性を広げることができた。⇒活動運営に関わる大人が 3 名から 8 名に増加)

4 取組において工夫した点

◆取組において直面した課題

公共施設の居場所活用としての用途の難しさ。(施設環境、他団体・利用者との兼ね合い、収容定員)施設管理者の方々の子どもへの寛容度や活動への理解。(張り紙、他団体との比較や叱責、「ルール」のすり合わせ)

◆解決策

活動のあえて、大々的な告知はせず、子どもたちの口コミで関係性を広げる形を取った。
活動ルールや施設管理者の琴線に触れないような使用の工夫とコミュニケーションの積み重ね。

◆その他工夫した点

活動や企画の起点を子どもたちの声から始める。また、そのアプローチ方法の実践と改善。
フェスのアイデアを子どもたちが出し合い、大人が応援する(大人が頑張りすぎず、子どもが手の届く範囲のことで)

5 今後の展開

◆今後の課題

- 活動エリアにおいて、小学生の現在の放課後の孤独感を低減する。
- 「たのしい」を軸とした、子ども発の地域活動への参加を通して、子どもも大人もゆるやかなつながりを広げ、居住地域を「居場所」と感じられる人を増やす。
- 大人も「たのしい」を軸に、地域内外から参画できる機会を創出し、地域コミュニティの起点となる関係資本が豊かな居場所をつくる。
- 様々な地域交流を通して、自分の将来や地域社会に対して前向きな感情を抱き、人生を切り開いていける力をもった子どもを増やし、将来的な孤独孤立リスクを低減する。

◆取組の継続方法

- 月 2 回の居場所運営と年 2 回のたのつくフェスの継続。
- 保護者に向けた活動認知の浸透。(今回作成したリーフレットの活用)
- 居場所を起点にした、各種プロジェクトの立ち上げ。例：工作手芸のネット販売、デイキャンプ等のアウトドア活動→一部収益事業も検討。

◆他団体への波及可能性

- 子どものための地域の居場所づくり、活動づくりのノウハウを言語化、集約
- 志を同じくする方の活動支援に資する活動展開の検討

●団体概要

こどもの地域活動「たのつく」

代表：渡部 岳/設立：2022年/スタッフ：3名

所在地：東京都小平市上水本町3-12-16

主な事業：こどもの居場所 等

●メッセージ

- 地域の中に子どもたちの多様な居場所がもっと増えて、その結果誰も取り残されない世の中が実現していくことを願っています。

小学生と地域の大人と学生たちが取り組む楽しい居場所づくり

NPO法人 地域で子どもを育む会(神奈川県川崎市)

●本事業のポイント

- ①小学生の第3の居場所
- ②多世代にわたるボランティアスタッフ
- ③地域の多世代交流により孤独孤立の抑制

●キーワード

こども・若者/中高年/
多世代・地域貢献

1 取組の背景と目的

◆居場所の不足

小学生の孤独孤立の深刻化。社会情勢により、一人親世帯、共稼ぎ世帯が多くなり、コロナ禍の影響もあり、居場所の無い子どもが増えている。



◆取組を始めるに至った経緯等

NPO法人地域で子どもを育む会は、コロナ禍で人とのかわりが出来にくい状況や家に帰っても夜まで子どもだけで過ごす子どものために第三の居場所としてスタートしたが、ボランティアスタッフの多世代の関りにより、子どもだけでなく地域の様々な人たちの居場所となる事となった。

◆取組の目的

小学生の孤独孤立の回避、多世代の地域ボランティアの居場所と役割。

具体的には、地域4校の公立小学校に通う1年～6年生までの居場所であり、学習支援の場であり、子ども食堂の場としてあり、ボランティア（高校生～70代まで）の方々と係ることにより、学校と家以外の場所で、自信をつけ安心して夕方から暗くなるまでいられる場の提供を目的としている。小学生、ボランティア双方の居場所でもある。

2 取組内容

◆具体的取組内容と特徴

・学習支援として

小学生の学年別計算プリントや各自が持ってくる学習教材の見守りや指導。相性の良いボランティアスタッフと毎回関わることにより、会話の中からの心のケアに努めている。

・子ども食堂として

毎回おにぎり講習として、自分でおにぎりを握り食べることで、おにぎりや細巻海苔巻きが作れるという自信が出来、残さず食べるようになります。

・食育・アート・音楽について

食べ物についての教育は、管理栄養学科の学生さんたちにより、楽しい遊びとして取り組んでいる。季節の工作や遊びは地域の大人ボランティアが考えており、双方の楽しみとなっている。音楽は、音大生による本格的な音色の提供が出きている。

◆連携先との関わり

連携先であるふ川崎市教育委員会とは、川崎市で取り組まれている「寺子屋事業」において、様々な情報を共有している。

フードバンク神奈川からは、頻繁に食材の提供を受けている。子ども用お菓子の提供は、「駄菓子屋さん」を行い、つり銭の計算などで役に立っている。

町内会とは、使用する会場が同じこともあり、年に何回かの割合で情報共有している。特にイベント時の掲示板利用などご協力いただいている。

川崎市社会福祉協議会からは、ボランティア保険について、地域の子どもの食堂の情報、他のボランティア団体で学習支援を行っている連絡先など情報の提供と事業運営の支援を受けている。

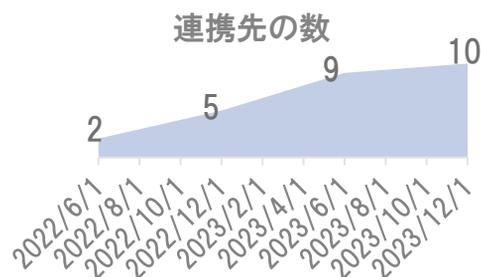
全国子ども食堂センターむすびえとは、YHPプログラムに参加している。

近隣大学（洗足学園音楽大学秋山ゼミ・昭和女子大学星ゼミ）にご協力いただいている。音楽指導や食育指導を提供してくれている。

◆連携方法

近隣の学校や大学には実際に出向き打ち合わせを行っている。また、関係者とはメール等で密に連絡を取り情報共有を行っている。

実施したいイベントに適した講師など地域の方へお願いしたり紹介を受けたり団体自ら動き関係を構築している。

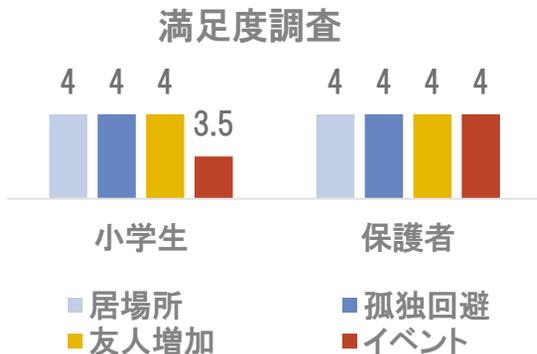


3 取組の成果

◆日常生活環境における予防効果

居場所の利用者が定員となり、増加している。

利用者アンケートでは、孤独を感じている人の割合が9割を超えていることが分かった。



◆つながりの醸成

利用者アンケートでは、これまで友達もなく一人であった方が、友達が出来たと感じるようになった。

利用者にとって本取組は、第三の居場所として、縦のつながり、様々な人とのつながりを感じる場所であった。



◆連携による効果

- ・フードバンク神奈川と連携したことにより、育ち盛りの高学年に満足いく温かいご飯を提供することが出来た、これまで団体単独ではできなかったことが連携することでできるようになった。
- ・むすびえとのYHPヤングヘルスプログラム参加により、社会人ボランティアの参加や食育をモチーフにした遊び道具の提供などでき、連携体制を構築したことにより、健康に関することの知識構築の効果があつた。
- ・音楽大学との連携により、楽しく明るい居場所作りが出来、子ども達に笑顔効果をもたらした。
- ・他のNPO団体（手を洗おう）との連携により、その会主催の「世界絵画展」に出展し表彰される児童もあり、自信へとつながった。当団体単独では展示できない規模であり、連携することによりそれがあつた。

4 取組において工夫した点

◆取組において直面した課題

進めていくうえで課題となったのは高学年の元気な男の子たちの発散させるカリキュラムの構築と、多世代多様なボランティアの方々の役割をどのように分担するかであった。

◆解決策

上記内容を解決するために、寺子屋で過ごす時間の中で体を動かせる時間を確保した。また、飽きさせない工夫として1つ1つのスケジュールを短めに設定する、学習時間や工作や食の時間の予定を決めメリハリをつけた。

大学生など学生には学習支援を中心に依頼し、地域の方には得意分野での指導を依頼するなど本人のやりがい、やる気につながる内容とした。

5 今後の展開

◆今後の課題

今年度の取組では、対象を小学生に限定している。次年度は今在籍している六年卒業に伴い、新たに中学生の時間を設けて、学校帰りのひと時の会話と小腹を満たす場所として馴染みある地域のボランティアと一緒に過ごせる居場所として取り組む必要がある。

◆取組の継続方法

本取組を来年度以降も継続するための資金調達の方法は、現在のところ助成金に頼ることが多い。少ないが、寄付金、賛助会員会費がある。

支援対象者とつながりつづけるために必ず、毎週金曜日に居場所をあけて受け入れる。また、保護者との関係構築にも努める。

◆他団体への波及可能性

この成果を通じて、他団体においても子どもの第三の居場所を実施することがスタンダード化することを期待する。場所があつても、そこに、話に耳を傾けるボランティアの大人がいることは必須である。学生の本文は勉強であることから、勉強の遅れを取り戻せるよう、学習補習できる環境も必要である。

今回の取組を通して、小学生は、楽しい場所でなければ来ることはいし、勉強が遅れている子は勉強が嫌いなので、伴走する大人が必要であることがわかった。本取組実施の際には、大人だけでなく、学生などの若者を降り入れると明るい雰囲気となり、子ども達も率先して学習に取り組むことがわかったので、学生ボランティア募集活動を入れてほしい。

●団体概要

NPO法人地域で子どもを育む会
代表：小畑 睦/設立：2021年/スタッフ：3名
所在地：神奈川県大和市つきみ野3-25-4
主な事業：寺子屋&子ども食堂

●メッセージ

- ・子ども、関わる大人それぞれが楽しんで集える居場所であること、継続して実施することで子どもの居場所としての役割を担うことができる。

地域貢献・仕事 (役割の創出)

みんなで繋がる！私の避難所

特定非営利活動法人 CONNECT（東京都大田区）

●本事業のポイント

- ①集いの場の高齢者が防災の知識を学び災害に備える
- ②集いの場のゆるやかなつながりの中で共助が機能する環境整備を実施
- ③多様な世代が交わる集いの場を創出する

●キーワード

高齢者/防災/自助/共助

1 取組の背景と目的

◆対象者が抱える課題

コロナウイルスの蔓延により、人と人とのつながりの希薄化が一段と進み、孤独や孤立感を感じる人が増加した。特に感染症にかかりやすく、重症化しやすい高齢者に於いては、その傾向が顕著に見られ、「ソーシャルディスタンス」という言葉が、人と人との繋がりやそれに付随する様々な支援をも分断する結果を招いている。



◆取組を始めるに至った経緯等

私達CONNECTは、平成24年より地域の中で様々なプログラムを展開し、高齢者の集いの場として実績のある「久が原ふれあいサロン虹の部屋」を事業の拠点として、コロナ禍でより希薄化が進んだ地域のつながりを、誰もが共通の関心事である「防災」を切り口にして、再構築していこうと考えた。高齢者の集いの場を活用することによって、多様な世代が交わり、顔の見える関係を築き、同時に災害に強い地域作りも目指そうと考えた。

◆取組の目的

- ①集いの場に集まる高齢者の方々を対象として、災害時に必要となる防災の知識・備えを学んでもらう機会を提供する。
- ②高齢者の集いの場を活用し、違う世代の防災啓発を行なうことによって、多様な世代が交わる場へとゆるやかに変化させていく。
- ③集いの場を中心として、ゆるやかなつながりの中で、災害時の避難場所や避難生活について考え、共助の生まれやすい環境整備を行なう。

2 取組内容

◆具体的取組内容と特徴

- ①行政と地域に向けて事前事業説明会を実施
事業概要と目指す地域の姿を示すことによって協力要請をおこなった。
- ②防災井戸端会議の実施
月に1回参加者の興味のあるテーマで防災の知識と備えの向上をはかった。
- ③防災井戸端会議番外編の実施
月に1回防災の疑問を話合ったり、実践することによって、災害を自分事にした。
- ④多様な世代に向け防災講座の実施
多様な世代が集いの場に参加出来るような防災講座を実施した。
- ⑤東京防災学習セミナーの実施
防災の総括として地域の中で3回実施した。
- ⑥防災井戸端会議参加者を対象に、毎回アンケートを実施し、防災力や備えの変化を調査した。

◆連携先との関わり

・連携先である大田区社会福祉協議会とは、調布地区担当の地域福祉コーディネータが防災井戸端会議・及び防災井戸端会議番外編に参加していた。地域の高齢者と直接関わる機会の多いコーディネーター自身の防災知識や防災力を向上させる事ができた。そのコーディネーターから、この会に参加出来ていない高齢者への防災知識の伝授が期待出来ると考えている。

・乳幼児向けの防災講座に於いては、保育士・消防士の資格を有する一般社団法人保育の寺子屋に講師を依頼、CONNECTとのリレー講師方式も試みた。

NPO法人CONNECTの特徴

- ・消防団員、元校長先生、町会役員、元PTA役員、民生委員
- ・上級応急手当指導員1名
- ・防災士4人
- ・避難所工エキスパート修了者5人
- ・災害時トイレ衛生管理講習会修了者2名
- ・東京防災講師担当

専門性が高い
地域と繋がりが
行政と繋がりが

その他の講師・連携団体

- ・一般社団法人保育の寺子屋
- ・防災クッキングアドバイザー 鈴木佳世子
- ・大田区社会福祉協議会 地域福祉コーディネーター

3 取組の成果

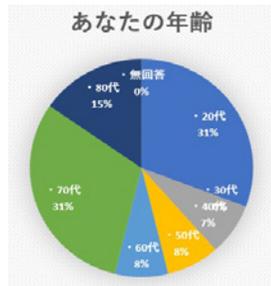
◆日常生活環境における予防効果

集いの場の利用者の内訳

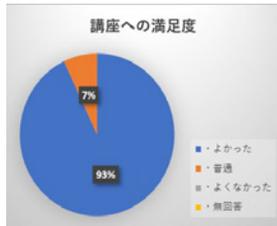
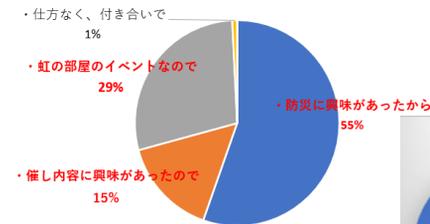
・普段は高齢者中心の集いの場であるが、防災イベントや講座の際の利用者内訳は20代50代と幅広い層の参加者を集えていた事がアンケート結果の分析からわかった。

又、参加者の参加理由について質問したところ、「防災に興味がある・イベント内容に興味がある」が70%を占めていた。集いの場の「虹の部屋でのイベントであったから」という回答も30%近くを占めており、安心して参加出来る環境だった事もうかがえる。

参加者のうち90%近くを女性が占めており、男性の参加は限定的であった。(アンケート集計結果より)



この催しに参加した理由



◆つながりの醸成

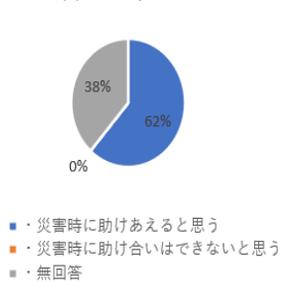
顔の見えるゆるやかなつながり

・利用者アンケートでは災害時に助け合える関係が出来たと回答した人は62%を占めるようになった。出来ないと思うという回答はなかったものの、気持ちはあるが自信がないという声が無回答の38%に多く占めていた。参加者が11回～12回の防災講座を通して、災害に対する知識と備えを学び、共助の重要性を認識したことによるものと考えられる

参加者の感想

- ・防災や災害について詳しく知る機会がなかったので、この半年間は大変学びがありました。
- ・水の備蓄や食料を買いました。トイレの備えもします。
- ・初めて参加して良かったです。

災害時の助け合い



指定避難所での地域向け防講座 (講師：出張所所長)



防災井戸端会議チラシ

4 取組において工夫した点

◆取組において工夫した点

- ・事業のキーワードともなる「防災」において、対象となる高齢者のニーズの把握と変化を調査する為に、事前のヒアリング、及び講座後のアンケート調査を毎回行なった。
- ・イベントの告知に関しては、開催日を毎月第二火曜日と金曜日と固定し、虹の部屋の利用者300人を対象にチラシをポストインする方式とした。又、地域住民に対しては、行政や町会掲示板への掲示、地域防災のライングループへの投稿といった方法も試みた。

事業を進める上での課題

- ・防災井戸端会議等のイベントへの集客
防災に関心のある人 = 参加者がある程度固定化してしまい、本来災害の備えが全く出来ない層へのアプローチが難しかった。
- ・高齢者と多様な世代との交流が上手く機能しない。
コロナ渦が収束傾向にあるとはいえ、感染リスクが高く、重症化しやすい高齢者にとって、多様な世代との交流はまだハードルが高い様子が見えられた。

5 今後の展開

◆今後の課題

- ・今年度の取組では、高齢者の集いの場として既に実績のあるところを中心として、高齢者の自助としての防災力アップと顔の見える緩やかな繋がりからの共助の兆しが見られるようになった。モデル事業という事で半年間という短いスパンだったため、多様な世代との交流という項目は計画通り進まず、課題として残ってしまった。今後は、小規模避難所への展開という今回達成出来なかった目標に向かって、事業を進めていく必要があると考える

◆取組の継続方法

- ・資金面では同じ様な主旨の助成金獲得を目指し、その中で残った課題を解決していく体制を整えたい。更に資金面のサポートとして、自主事業の販路拡大も目指す。

●団体概要

特定非営利活動法人CONNECT

代表：原田美奈子/設立：2014年/スタッフ：11名

所在地：東京都大田区西嶺町21-18

<https://www.connect1010.com/>

主な事業：東京都大田区を中心として、女性目線を大切に防災・減災活動を展開

●メッセージ

- ・この成果を通じて、地域の中の集いの場が、多様なニーズに対応した小規模避難所として活用出来るというモデルケースとして、地域の中に広がっていくことにより、災害に強いまち作りに貢献できると考えています。

地域暮らしの「先輩」との対話による孤独・孤立対策の推進

一般社団法人 青空プロジェクト THE DAY (栃木県那須塩原市)

● 本事業のポイント

- ① 地元高齢者の社会参加とアウトドアアクティビティを結び付けた。
- ② 地元高齢者と地域外の若者（大学生）との対話を推進した。
- ③ 多様な連携団体と地域をつなぐコーディネーターの役割を果たした。

● キーワード

アウトドア/高齢者
/関係人口/鳥獣
害対策

1 取組の背景と目的

◆ 対象者が抱える課題

日常生活における孤独・孤立について、塩原地区の地域特性を踏まえると、特に高齢者を対象とした予防や早期対策が喫緊の課題であると考えます。



◆ 取組を始めるに至った経緯等

当団体では、鳥獣害対策による地域活性化や人間と生き物との共生社会の実現を目指して活動している。こうした活動は我々が取り組む以前から様々な形で行われ、とすれば我々の先輩たちが無意識のうちに行っていたことも少なからずあるものと考えている。歴史的に行われてきたそうした取組を大切にしつつ、地域の現状に即した形にアレンジ/リメイクすることが「塩原ならではの地域づくりにつながると考えた。

加えて、こうした「先人事例」に学ぶプロセスは他地域でも展開可能であると考え、地域内外の子ども・若者たちの参加を得て取り組むことで、異世代交流や地域の知の継承、さらには都市農村交流や地域の魅力発信といった様々な波及効果が期待できる。

◆ 取組の目的

塩原地区で地域づくりに取り組んできた「先人たち」である地元の高齢者が有する「知」を可視化することで、未来の地域づくりに向けたレバレッジポイントが明らかになるとともに、地域内外の子ども・若者たちの参加により、異世代交流と「知」の継承が推進することを目的とする。

2 取組内容

◆ 具体的取組内容と特徴

実施期間前半は、地元の高齢者との関係性の構築に注力した。具体的には、月1回（第3土曜）、「青空食堂」を開催し、食事の提供や里山保全の草刈り・枝打ち、農作業体験などに地元の高齢者や地域外から訪れた、いわゆる「関係人口」が参加した。特に、これまで接点がなかった地元高齢女性の協力を得て、食事の提供を行うことができた。

また、実施期間後半は、大学生等の若者の活動受入を積極的に行い、当団体が来訪者に提供しているアウトドアアクティビティや里山保全の草刈り・枝打ちなどの体験に加え、地元高齢者との対話の場に参加した。短時間ではあったが、世代を超えて、名前で呼び合う関係性を構築することができ、高齢者も若者も元気になる様子が印象的であった。

従前の活動について、メディア等で取り上げられる一方で、地元住民からの認知が不足していると感じていた。本事業をきっかけに、「地元住民も役割を持って参加できる活動」に取り組めるようになり、塩原地区における関係人口の創出・拡大に向けて、地元住民の理解が広がったと感じている。

◆ 連携先との関わり

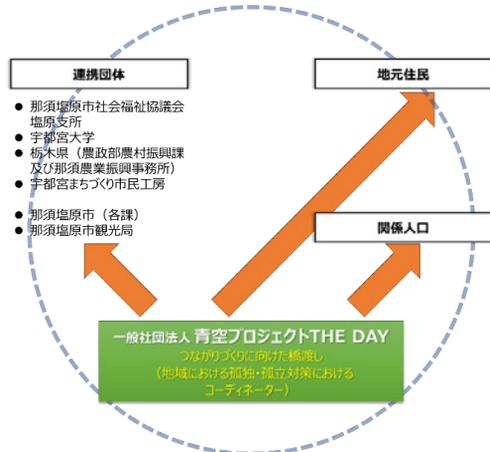
本事業は、地域福祉の取組であることから、地元の社会福祉協議会の協力を得て実施した。また、県内大学生による地域活性化に向けたフィールドワークを受け入れ、前述の活動体験や地元の高齢者との対話の場への参加をコーディネートした。

こうした取組全般について、非営利組織やまちづくりに関する調査や大学との連携実績があり、里山整備活動における従前からの協働パートナーである県内中間支援NPOとの連携も強化した。主な内容として、情報発信等関係人口への働きかけや大学生の受入に関することが挙げられる。



◆連携方法

地元社会福祉協議会が地域住民に呼びかけて開催した災害時要援護者に関する情報共有会議に当団体メンバーの防災士2名が話題提供者として参加するとともに、県内大学教員及び学生にも参加を呼びかけ、対話をとおして地域の要援護者や危険箇所、平常時の暮らしぶりについて把握することができた。このほか、当団体では設立以来、県農政所管部局の支援を受けているが、県事業の一環で養成した「農村魅力発見発信若者レポーター」2名が活動に参加し、関係者に対してインタビューを行った（その結果は、追って「TUNAGU」（県が開設した農村ボランティアマッチングサイト）に掲載予定）。



3 取組の成果

◆つながりの醸成

塩原地区の地域づくり「先人事例」を有する地元の高齢者について、特に女性陣は、この事業が当団体の活動に参加するきっかけとなり、調理という「特技」とおして、個々人の生きがいや地域における多世代交流につながっている。

4 取組において工夫した点

◆取組において直面した課題

当該地域外の若者が足を運び、地元高齢者との交流を推進することができたが、当該地域出身の若者とのかわりは限定的であった。

◆解決策

一方で、数としては少ないものの、当団体の活動に共感した地元出身の若者が、様々な役割を担う体制もできつつあり、こうした人材の力を生かせる体制を構築したい。

5 今後の展開

◆今後の課題

塩原地区に広がる自然環境を生かし、未来につなげるために、その保全や活用を進める活動を行うなかで、地域で暮らす住民もまた大切な資源であることを認識した。そうした地域の魅力を発信することに加え、地元の高齢者の生きがいにつながる活動が必要であると考えた。今後は、「青空食堂」が地域に根付き、参加する地元の高齢者が生きがいとして活動に参加できるよう、拠点整備を推進する。

◆取組の継続方法

塩原地区に広がる自然環境を生かし、未来につなげるために、その保全や活用を進める活動を行うなかで、地域で暮らす住民もまた大切な資源であることを認識した。そうした地域の魅力を発信することに加え、地元の高齢者の生きがいにつながる活動が必要であると考えた。今後は、「青空食堂」が地域に根付き、参加する地元の高齢者が生きがいとして活動に参加できるよう、拠点整備を推進する。

◆他団体への波及可能性

前述してきた取組は、地元の人や風土に立脚した「塩原地区ならでは」のものであり、波及可能性は限定的であると思われる。



●団体概要

一般社団法人 青空プロジェクトTHE DAY
代表：君島陽一/設立：2020年/スタッフ：3名
所在地：栃木県那須塩原市中塩原569
<https://theday.fun/>
主な事業：アウトドアアクティビティ事業

●メッセージ

・ マウンテンバイクやスノーボード等のアウトドアアクティビティの取組を契機に設立した当団体であるが、孤独・孤立の解消や地域活性化にもつながることが分かった。今後も、塩原の人と風土を大切にしながら、活動を推進していく。

自治会運営サポート地域デジタル化推進支援×住民の 孤独・孤独世帯を防ぐ取組み

一般社団法人 Shien (大阪府岸和田市)

●本事業のポイント

- ①自治会運営変革サポート
- ②地域デジタル化推進 (情報格差是正と災害時の迅速な安否認)
- ③役員業務の負荷軽減

●キーワード

自治体DX/情報共有/住民参画/協働/災害に強いまちづくり/住み続けられるまちづくり

1 取組の背景と目的

◆対象者が抱える課題

自治会が直面する課題は、加入率の低下や役員のなり手がいないといった現実がある。実際、役員業務量が多く、役員になることを逃れるため退会されたり、前例踏襲主義の組織に興味がなく、そもそも加入しないといった若い世帯も増えてきている。このままでは地域そのものが成り立たないといった課題があることに気づいた。

◆取組を始めるに至った経緯等

そもそも現代社会において、回覧板をいつまで回し続けるのだろうかといった疑問から電子回覧板アプリ結ネットに携わり、デジタルで出来ることはデジタルに任せ、自治会運営の変革から若い世代の地域の関わりとなり、高齢世帯と若い世帯の融合を図り、これまで抱えてきた課題解決の担い手とし住み続けられるまちづくりへの協働となる考えに至りました。

2 取組内容

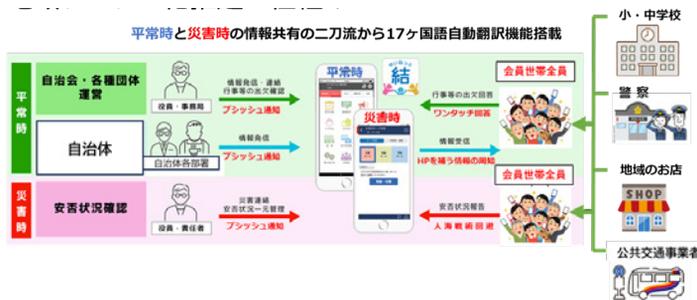
◆具体的取組内容と特徴

・手間暇をかけたこれまでの地域の情報伝達からデジタルを活用した一斉送信による情報共有。
回す・配る・回収する作業を減らせることを体感いただく。

・平常時と災害時の情報一元化と役員の業務負担軽減を理解頂き、地域をつなぐことからこれまで抱えてきた課題解決につなげ、一人暮らし高齢者の見守りや災害に強いまちづくりのデジタル技術革新の基盤をつくる。

・今後課題となる孤独・孤立を防ぐ対策や今後増える外国人住民への言語対策にも備え、地域の課題解決を支えるデジタル化を目指します。

(結ネットを活用した地域デジタル技術革新の基盤イメージ図)



◆連携先との関わり

連携先である阪南市は、地域DXの推進でつながる「まちづくり」を掲げられ、その具体的手法として、当方が行った愛知県豊川市の先行事例をご覧ください問い合わせ及び訪問説明により関わりとなりました。

◆連携方法

阪南市と連携するため、当法人が運営する電子回覧板「結ネット」アプリを活用し、具体的な事例及び阪南市に沿った地域支援アプリの提案を行い、その提案に賛同頂き、阪南市と自治会連合会等協定締結による連携となりました。

内容については、官民連携となるデジタル化推進により人がつながり、地域がつながる共創のまちの実現に向けた地域DX推進事業といった取組みです。

地域の情報がいつでもどこからでも確認でき、持ち運びできる回覧板



デジタル自治会×役員様の助っ人

担い手不足・聞いた聞いていない



問題はデジタル回覧板アプリ

結で解決!

- ハンコも不要しかも回さない回覧板
- 自宅やどこからでも見える周知板
- いつでもどこでも聞こえる町内放送
- 災害時の迅速な安否確認

◆取組の目的

自治会及び地域運営組織を対象に、電子回覧板アプリ(結ネット)を活用した地域が抱える課題解決をサポートを行い、同時に地域デジタル化推進による自治会運営の変革をサポートし、地域がつながることから新たなコミュニティの創出を目的とします。

(地域デジタル推進活動)

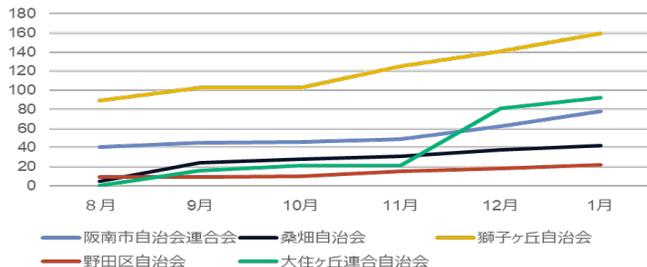


3 取組の成果

◆日常生活環境における予防効果

8月から1月までの実証実験アプリ、利用者ログイン状況は右肩上がりに増加傾向を示し、ログイン数が増えることで、地域における孤独・孤立防止への体制構築につながればと考えている。

結ネットログイン状況



◆つながりの醸成

電子回覧板導入により、情報一元化からスマホが苦手な高齢者に対し、若い世代が教えるといった新たなコミュニティとなり、同時に地域デジタル化推進の相乗効果から孤独・孤立防止にもつなげる。



◆連携による効果

阪南市と連携したことにより、官民連携から民間単独だけで行えないような取組みにもチャレンジすることができ、電子回覧板アプリに行政情報も加わり、自治会情報と合わせ、地域の情報一元化となるアプリとしてさらに付加価値を理解頂き連携による効果を実感頂けた。

また官民連携体制の構築の足がかりとなったことでさらに他地域からの問い合わせもあり、新たな事例として地域デジタル化推進への横展開につながる確信を得ることもできました。

さらに自治会組織でも新たな取組みとした前例踏襲の打破となり、コロナ禍における地域の希薄化に変化をもたらすことに気づいて頂き、地域がつながることで孤独・孤立防止への意識づけとなり一定の効果となったと考えます。



4 取組において工夫した点

◆取組において直面した課題

スマホは高齢者にも多く普及しているが、ガラケー携帯の代替えといったもので、例えばスマホにアプリをインストールからログインを出来ない方が大半であり、これが大きな課題でありました。しかしながらこれをきっかけに出来るようにすることも誰一人取り残さないデジタル化であります。

◆解決策

1つの事例として、高校生ボランティアによる高齢者のスマホへのインストールからログインを手助けしてもらったケースもあり、これもまた若い世代と高齢者との新たなコミュニティにも寄与できたと考える。

5 今後の展開

◆今後の課題

まだまだデジタルへのアレルギー反応のある地域もあり、自治会運営に加えてデジタル化を推進することが新たな業務負担と考える自治会役員も多く存在することは、同時に自治体のDX推進にも影響があり、同時に加速させるための官民連携となるデジタル化推進の必要性を引き続き自治体に訴えて参りたいと考えます。

◆取組の継続方法

導入地域からの口コミはもちろんデジタルを活用することの利便性をもっと多くの方に理解頂き、次世代を見据え本活動をやり続けることが重要であると考えます。

◆他団体への波及可能性

電子回覧板「結ネット」アプリを通じ、現在実証実験を行う自治会ログイン数を増加させ、これまでの組織運営の見直しと課題解決となる利便性を体感していただき、地域がつながることの重要性をご理解していただけたと考えます。またこの事例を活用し、他の自治体及び自治会についてもデジタル化推進と孤独・孤立世帯を防ぐパッケージとして波及効果となる自信となりました。

●団体概要

一般社団法人 *Shien*
代表：山田浩史/設立：2018年/スタッフ：2名
所在地：大阪府岸和田市作才町1254-803
<https://shien-yuinet.jp/>
主な事業：結ネット推進事業・地域シェアリングエコノミー事業他

●メッセージ

- 人と人を結ぶことできっとまちは変わります。
- 地域で一番身近な組織の課題解決と誰一人取り残さない地域デジタル化に是非チャレンジ下さい。

食の提供

不登校やひきこもり傾向の若者がつなぐ世代間交流

特定非営利活動法人 教育支援協会南関東（神奈川県横浜市）

●本事業のポイント

- ①子ども食堂に参加しているご家族が地域とのつながりをつくること
- ②子ども食堂の地域スタッフ、子ども食堂参加者、中高生との交流を促進すること
- ③不登校やひきこもり傾向の若者の社会参加の場をつくること

●キーワード
不登校/こども・
若者/中高年/多
世代/地域貢献

1 取組の背景と目的

◆世代間交流の橋渡し

睦町地域で活動している子ども食堂の地域スタッフは高齢の方も多く、食事提供で精一杯で、子ども食堂参加者との関係性を構築することに難しさを感じていた。

また、子ども食堂の提供場所がコロナの影響により室内から室外になったことでただ、食事を渡すだけとなり交流が難しい状況になっていた。



◆取組を始めるに至った経緯等

当法人が支援してきた不登校やひきこもりの若者は社会体験や人とかかわる機会が不足し、自立の大きなハードルになっているという課題を感じていた。そこで、地域の子ども食堂で参加者の対応をすることを通して社会的自立に向かう力が育まれるのではという期待があり、この取組を行った。

◆取組の目的

今回の取組の目的は3つあります。

- ①子ども食堂に参加しているご家族が地域とのつながりを強めること
- ②地域スタッフ、子ども食堂参加者、中高生との交流を促進すること
- ③不登校やひきこもり傾向の若者の社会参加の場をつくること

2 取組内容

◆具体的取組内容と特徴

①こども食堂を実施している団体や会場でもある睦ヶアプラザの職員にヒアリングを行った。現状の課題や要望を聞くと共に、今後の中高生の受け入れ協力をお願いした。また、団体や職員には中高生がスタッフとしてではなく、主体的な参加が可能ないように説明を行った。

②中高生と子ども食堂のスタッフと一緒に活動場所となる子ども食堂の見学を行うとともに、子ども食堂のスタッフへのインタビューを行った。中高生は、子ども食堂スタッフに歓迎されたことで、安心感を持てたように感じた。

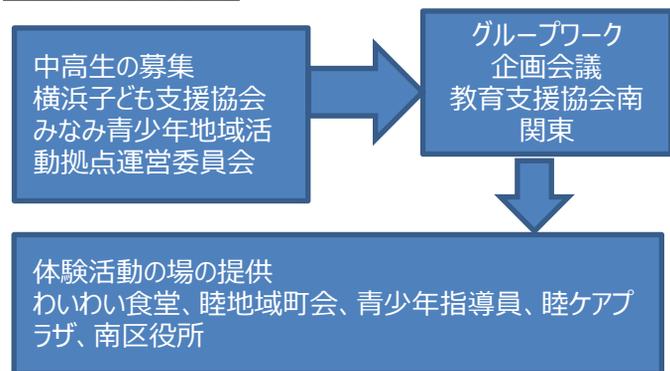
不登校やひきこもりへの関心が高い子ども食堂スタッフも多くいたため、子ども食堂終了後に意見交換を行うことができた。（教育支援協会南関東のスタッフのみ参加）

③当初は、子ども食堂の場で企画した体験活動を実施する予定だったが、会場の都合で、今年度は屋外駐車場の場でお弁当配布のみとなり、体験活動は実施出来ないこととなった。そこで、子ども食堂の場ではガチャガチャを通して参加の子どもと交流することにした。

④子ども食堂で体験活動を行えないため、子ども食堂の参加者が集まる地域イベントで中高生企画を実施することで機会を創出した。子ども食堂のスタッフもかわる地域イベントであったことから、スタッフとの交流も促進した。

地域みこし参加 ・睦映画会 ・南区バザー ・南区文化祭 ・つながるイベント

◆連携先との関わり



◆連携方法

不登校やひきこもり傾向の若者を集めるために、横浜子ども支援協議会等の関係団体に協力を依頼したことや不登校生などが集まっている地域の居場所で声をかけるなどの取組を行った。

連携するにあたり、中高生の現状や背景を理解してもらった上で、一緒に育ててほしいことを伝えるようにした。結果として、地域の様々な方から見守り支えてもらうことが出来た。

3 取組の成果

◆日常生活環境における予防効果

不登校等の中高生の変化

中高生世代の参加者は、毎回5人程度の参加であり、継続して参加する中学生もいた。初対面の存在や大人に苦手意識を持っていた中高生世代も子ども食堂のスタッフのサポートもあり、1月のイベントの後のアンケートではスタッフが何もサポートしなくても会話や作業を行うことができた。

◆つながりの醸成

子ども食堂に参加している子どもは未就学児・小学生が多く、年齢が近いこともあり、事業に参加している中高生に笑顔で近づいてくることも多く、中高生にとっては相手に求められる経験が、安心感と自信につながっているように見られた。



子ども食堂のスタッフも中高生の存在を表情がすごく変わった、頼りになる存在だったと、中高生の成長を喜んでくれた。

◆連携による効果

下記のアンケートの通り、これまで接点が少なかった世代（子ども食堂のスタッフ、参加の子どもたち、学生）との交流によりあらたな気づきが生まれている。

その他のアンケート内容

（子ども食堂スタッフ）

- やはり、子どもには若い人の方が嬉しいみたいだったので、とても助かった。
- 子どもに対して自然なかかわりが出来るのがすごいと思った。
- 地域活動に若い世代があると、参加する子どもや保護者の表情も明るくなる。若い世代のパワーを感じた。
- 地域スタッフが調理、お弁当配布に専念できたが、今回の若い世代のかかわりを活かしてもっと参加者が元気になるような活動にしていきたい。

（参加者）

- 子ども食堂で見たことがある人が地域イベントにもいると嬉しかった。
- 初対面の人でも子どもが話している姿を見てすごいと感じた。
- 高校生が好きなマンガを描いてくれて家でも大事にしている。
- お弁当をもらうだけでなく、いろいろ話しかけてくれるので、楽しい時間になった。
- 普段、兄弟だけで過ごしているので兄がとても嬉しそうに話していたのが印象に残りました。

（中高生）

- 毎回、楽しみに待っている子どもがいてくれるのは嬉しかった。
- こんなに優しい大人がいることにびっくりした。
- みんなが集まる場にいることが好きなんだと分かった。

4 取組において工夫した点

子ども食堂の室内での実施が不可能な状況で、地域イベントにも参加して、地域につながりをつくることを目指して活動することにした。

地域からは、人員として期待されることも多く、子ども若者の主体的な活動が少なくなってしまうという課題が生じた。そのため、子ども若者は主体性が発揮できる行事を中心に参加し、それ以外の行事は当法人スタッフや大学生ボランティアで参加することにした。

不登校やひきこもり傾向の中高生世代を募集するにあたり、関係機関と連携する際に、関係機関の職員の都合など調整が難しいことが多かったので、実際に集まっている場に行って直接声をかけたほうが集まりやすく、継続性も高いことが分かった。

5 今後の展開

◆今後の課題

今回の事業を通して、子どもがひきこもりの状況で家族自体が地域との関係性を拒んでいる、地域につながりがない私立中高生の不登校とその家族、保護者が精神疾患を抱える家族など孤立したままの家庭もいるという情報を得ることが出来た。地域とのつながりだけでなく、専門機関など多様なアプローチによってそれらの家庭とのつながりをつくっていくこと今後の課題である。

◆取組の継続方法

より一層地域の方にご理解・ご協力をいただき、中高生が主体的に活動できる場や機会を増やしていくことと多様な団体との連携を通して、費用をねん出し、地域に根付かせていきたい。

◆他団体への波及可能性

この成果を通じて、学校に通っていない中高生の体験の場や学びの場が社会に広がっていくこと、他団体にも広がることで多様な育ちや学びの保障につながるのではないかと期待がある。

不登校や困難を抱えている中高生を支援の対象としてではなく、地域の担い手として見守り育てることで、地域の多世代がつながり、地域全体に優しさの輪が広がったように感じた。

●団体概要

特定非営利活動法人教育支援協会南関東
代表：岩間 文孝/設立：1999年/スタッフ：名
所在地：神奈川県横浜市南区高根町3-17-12
主な事業：不登校児学習支援、自立支援等

●メッセージ

• 子ども食堂のスタッフ（中高年）世代と利用する子どもとのつなぎ役で中高生が参加しスタートした事業であるが、中高生の体験の場、地域の担い手としての経験にもつながり、関わった関係者とのわが広がった。

スマイルフードドライブ事業

特定非営利活動法人 アクションタウンラボ（福岡県福岡市）

●本事業のポイント

- ①フードドライブのインフラ化
- ②食品ロスに対する啓発
- ③食品ロス及びフードドライブの新たな価値創出

●キーワード

子ども・若者/イベント/
地域づくり

1 取組の背景と目的

◆対象者が抱える課題

子どもの貧困が6人に1人と
言われている。給食しか食べ
るものがないと訴える子ども
もいると聞く。その反面、食品ロ
スの量は世界で有数の量とな
っている日本。実に全国民が毎
日、おにぎり2個づつ捨てて
いる量に匹敵する量が廃棄さ
れているという事実もある。



フードドライブボックスに
寄付された食品

◆取組を始めるに至った経緯等

以前から地縁組織や地域の事業所や行政とともに「フードドライブ協議会(仮)」設立に向けて活動をしてきた。これは循環型共生社会を構築目指したものであった。コロナ期を経て、その活動自体は頓挫してしまっただが、その活動を継続していきたいと志を持った市民らと協働し、本事業の取組に繋がっている。

◆取組の目的

フードドライブキャンペーンでは、子ども食堂や困窮家庭だけでなく、独居高齢者などの孤立を抱えた住民への困り感の解消と孤立の解消を目的とした。ロスロス！ハロウィン！では4小学校校区での活動を実施し、様々な地域の住民にも啓発効果を目的とし、たべものレスキューでは、多くの地域の子どもや保護者だけでなく、教員などにも啓発効果も目的とした。本事業を実施することにより、孤立しがちなシングル家庭や独居高齢者、共働きによる地域との交流が疎遠な住民などに対して、さまざまな支援の手が届くきっかけとなること、本事業が実施されることにより、気軽に「家で余っている食材を近くにあるフードドライブボックスに入れる」という行為を行うことにより、地域で気兼ねなく食資源の循環ができ、支援を受ける側でも支援される側でもなく地域全体でつくっていく循環型地域共生社会の構築に寄与できるのではないかと考えた。

2 取組内容

◆具体的取組内容と特徴

1) フードドライブキャンペーン

6月より東区役所公民館支援課との協議を開始するも、一向に話が進まず、再協議の場も持つことがなかった。社会福祉協議会や自治協からもアクションを起こしてもらおうが結局、年度末まで再協議の場を持つことができなかった。

◆具体的取組内容と特徴

2) ロスロス！ハロウィン！

6月よりすでにリストアップしている対象地域の校区や地域住民に対して説明会などの実施、協力依頼、参加する子どもたちへのリーチを7月から開始、9月から10月にかけて勉強会を実施し、10月25日に香椎駅前商店街、10月29日に香椎下原校区と商業施設であるランチ福岡下原の3箇所を実施。

3) たべものレスキュー

は6月に開発進捗会議を行い、9月にはリハーサルを実施しブラッシュアップして10月29日開催した。内容は食品ロスになりそうな食品を使ったカレーづくり。福岡市中央青果市場、みんな食Minna(子ども食堂団体)などが協働し、九州産業大学たべものレスキュープロジェクトと協働企画として実施。特に子どもの自主性と学びを重んじ、保護者の入場を制限したことにより、子どもが自ら発見したり、仲間と協力したり、やったことないことに挑戦する姿が見られ、その中で「食品ロス」について机上でなく、体感で学ぶことができたことは非常に大きいと考察する。

◆連携先との関わり

【実施主体】

特定非営利活動法人アクションタウンラボ

【協働団体】

1) フードドライブキャンペーン

福岡市社会福祉協議会、香椎下原自治協議会、香住丘自治協議会、九州産業大学

2) ロスロス！ハロウィン！

Laboいしかわparty、香椎下原自治協議会、ランチ福岡下原（大和リース株式会社）

3) たべものレスキュー

九産大たべものレスキュープロジェクト、みんな食Minna、福岡市中央青果市場

◆個人情報の取り扱い等、連携先との情報のやりとりについて

個人情報の取り扱いに関しては、主体である弊団体が一元管理することで第三者へ情報が漏洩することを防いだ。連携先のやりとりなどは、電話やメール、SNSのグループチャット機能などを適時適用し情報共有を図っていた。

◆連携方法

行政と連携するため、社会福祉協議会や地縁団体などにも協力してもらいながらアプローチを行った。また、地域の事業所については、地縁組織や地域活動団体などを介して、アプローチを行っていった。

3 取組の成果

◆日常生活環境における予防効果

- ・フードドライブボックスを10箇所に設置したことにより、日常生活のなかで食品を寄付する活動が普及したと言える
- ・食品ロス食材を使って子どもたちが調理することで、家庭に戻っても行動に変化が現れたことが保護者へのヒアリングで聞かれた。



フードドライブボックス

◆つながりの醸成

- ・地域活動団体、商店街、地縁組織、商業施設、子ども食堂など、今まではつながることがなかった団体がつながりが醸成できた



ロスロス！ハロウィン！①

◆連携による効果

- ・様々なカテゴリーの団体がつながることにより、“食品ロス”“孤食”“孤立する子育て環境”などの直接的な社会課題への啓発効果はもちろんだが、地域の中で“顔の見える”カテゴリーを超えた地域環境づくりに寄与できたのではないかと考える。実際、暮らしの中の課題は多岐にわたる。様々な特異性を持った団体がつながることにより、それぞれが包摂した住民間の支え合いができるということに気づいたことは大きいと感じている。



食べ物レスキューワークショップ①



食べ物レスキューワークショップ②

4 取組において工夫した点

◆取組において直面した課題

- ・行政との連携、本庁と区役所間の温度差による連携の難しさがあった。
- ・地域住民への理解浸透が進まなかった。公民館へ来館される住民でなく、普段地域活動に参加しない住民への啓発の難しさを感じた。

◆解決策

- ・行政との連携に関しては、行政だけでなく、地縁組織や社会福祉協議会などを介して、連携を模索した。その結果、行政との連携は実現しなかったが、特に地縁組織の持っている課題の抽出ができたという副次的成果があった。

5 今後の展開

◆今後の課題

- ・今後は、地域活動団体や地縁組織が自主的に取り組んでいくことを期待する。

◆取組の継続方法

- ・来年度は弊団体の体制が一新されることになり、今後の取組に関しては現在検討している段階である。

◆他団体への波及可能性

- ・この成果を通じて、他団体においても食品ロスや子ども食堂への関心が高まり、自主的に取り組む兆しが出てきた。また、フードドライブボックスに関しては各拠点が自主的に寄付先を見つけるなどの動きも見られている。



ロスロス！ハロウィン！②



食べ物レスキューワークショップ③

●団体概要

特定非営利活動法人アクションタウンラボ
代表：転野康臣/設立：2019年/スタッフ：3名
所在地：福岡県福岡市東区下原4-2-1
主な事業：食品ロス勉強会、食品ロス回収体験会等

●メッセージ

- ・今回の取組を通して、住民たちが自主的に取り組むことの大切さを感じてもらえたのではないかと思います。このような取組はイベントではなく日常の暮らしの中で取り組むことが大切なので、今後も継続して取り組んでほしい。

イベント

ぶらウォーク福岡

特定非営利活動法人 福岡終活・相続支援センターみらいあん（福岡県福岡市）

●本事業のポイント

- ①健康に過ごすためにウォーキングを通じ日常的な啓発を促す
- ②個々の願いを集結し人と交流することにより明日への生きる活力とする
- ③ひとりでは決して達成できない日本一周という目標をみんなと一緒に達成することで生きる自信と励みにする

●キーワード

多世代/イベント/
地域づくり

1 取組の背景と目的

◆対象者が抱える課題

高齢者支援を行う中で、高齢者と地域のつながりが欠如していることが多いと気付いた。



ぶらウォーク集合写真

◆取組を始めるに至った経緯等

高齢者と地域のつながりをつくる素地として地域活動の活性化を目指した。そこで、2018年に福岡市民の憩いの公園である大濠公園で、知らない人々が集まり、一緒に歩くというイベントを始めた。

◆取組の目的

健康増進のために歩くというだけでなく、参加者全員の歩いた距離の累計で日本一周を達成するという共通目標を設定することで、達成のために参加者の中に一体感や団結感を生み、各々、人とのつながりを感じてもらう。また、自然の中で無理なくゆっくり歩きながら幅広い世代の人々と交流を深めることで、精神安定、満足感、達成感を感じてもらい、日常生活でのやる気の増進、孤独・孤立感の払拭につなげる。また、継続的に参加していただくことで、さらに健康増進、孤独・孤立防止の効果を高める。



2 取組内容

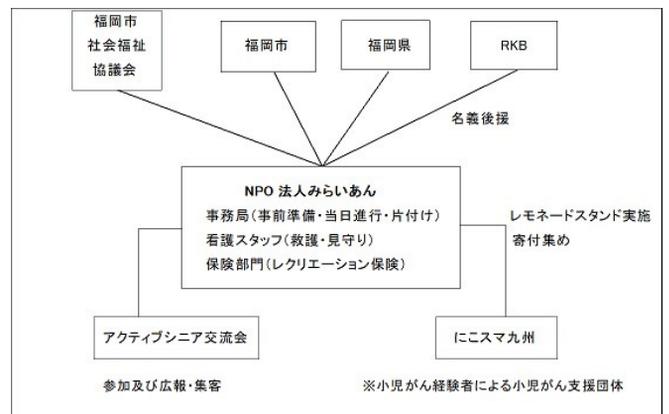
◆具体的取組内容と特徴

- ぶらウォーク参加者の歩いた距離の累計で日本一周(8955km)を完歩する。これまでの開催で参加者がつないできた距離の合計は4000kmを越え、福岡から北海道まで進んでいる。
- 日本一周達成後、それまでの願い事カードを全てつなげ、一枚の旗にし太宰府天満宮に奉納する。
- 受付時、各々願い事カードに自身の願い事を記入し、願いを込めて参加者全員で2kmのウォーキングコースを2週する。
- 昼食を取りながらのおしゃべり会を実施し参加者間の親睦を図る。
- お楽しみ抽選会や子ども向けのお菓子のつかみ取りで楽しんでいただく。



◆連携先との関わり

- 福岡市、福岡県、福岡市社会福祉協議会等、名義後援をいただいた。また、福岡市の広報誌にイベント情報として掲載していただくことでかなりの集客力アップにつながった。
- 協力団体のASK(アクティブシニア交流会)には周知活動、参加で貢献いただいた。
- ぶらウォーク実施時、レモネードスタンドを行い、協力団体である小児がん経験者による小児がん患者支援団体「にこスマ九州」への寄付を募った。



3 取組の成果

◆日常生活環境における予防効果

参加後のアンケートより

- 久しぶりに外で体を動かし、気持ちが晴れてスッキリした
- 改めて願い事を書いたことで目標が持てた
- 参加時の写真を部屋に飾っている。目に付く毎にうれしくなる。
- 主催団体（当団体）が終活・相続支援をされているので相談に伺いたい
- また次回も参加したい
- 以前はたくさん歩いても何ともなかったがきつかった。普段から運動したい。



参加者全員の歩いた距離の累計（日本一周を目指す）

以上のようなご感想を多数いただいている。継続的に参加されている方も多く、日常生活の活性化に繋がっていると感じられる。



◆つながりの醸成

参加後のアンケートより

- 普段接することのない小さなお子さんと触れ合うことができ孫が小さかった頃のことを思い出した。
- 次の開催が楽しみです。
- 私にとって負担の少ない歩き方や腰痛予防の体操を教えてもらえてよかった。

定量的な評価は難しいが、効果は実感できている。継続することでさらにつながりを醸成していきたい。



目標達成に向けて一体感が生まれる

◆連携による効果

- アクティブシニア交流会との連携により、イベントの周知や集客に大きな効果があった。
- 福岡市の広報誌のイベント情報欄に掲載いただいたことで、当団体への問い合わせ、当日の参加人数が2倍以上に増加した。

4 取組において工夫した点

◆取組において直面した課題

新型コロナウイルス蔓延に伴い活動を休止、2023年9月から再開するも当団体のSNS発信、チラシ配布、ポスター掲示だけではなかなか集客に結びつかない。

◆解決策

協力団体への要請、福岡市広報誌でのイベント情報掲載により大幅な増員となった。また、ご参加いただいた方に当団体の公式ラインへ登録いただくことで、ダイレクトにイベント情報を届けられることで継続参加を促すことが可能となった。

5 今後の展開

◆今後の課題

今年度の取組では、福岡県内2箇所での開催にとどまったが、次年度はより多くの方にご参加いただけるよう開催地を増やしていく。

また、朝日を浴びながら、会話ができる程度のゆっくりペースで歩くことは質の良い睡眠、ストレスケアにとっても有効であり、そのような情報もお伝えしながら、長く取り組んでいただけるよう、日常生活の中でも取り入れていただけるよう啓発活動も合わせて行っていきたい。

◆取組の継続方法

- 本取組を来年度以降も継続するための資金調達の方法は今回と同様に助成金・補助金を受けられるよう申請を行う。
- 支援対象者となつながりつづけるために当団体のホームページや公式ラインにでの情報提供、参加の呼びかけを続けていく。

◆他団体への波及可能性

この成果を通じて、他地域においてもぶらウォークを開催していただき、日本一周を目指してもらうのみならず、全国のぶらウォーク団体共同で世界一周できることを期待している。

●団体概要

特定非営利活動法人 福岡終活・相続支援センターみらいあん

代表：梅崎守/設立：2013年/スタッフ：13名

所在地：福岡市中央区大名2丁目4-38-6F

主な事業：居住支援、介護施設紹介、健康増進支援、相続・贈与・遺言書作成サポート、遺品整理、成年後見制度手続きサポート等

●メッセージ

- 今回の取組を通して、人と人のつながりの大切さを今まで以上に感じた。
- 本取組にご興味のある団体の方は是非ご連絡ください。一緒に世界一周を目指し、孤独・孤立に無縁な笑顔の輪を広げていきましょう！！

フレイル予防、認知症（MCI）予防、仲間作り 地域サロン・さくら（千葉県柏市）

● 本事業のポイント

- ①参加者がサロンに来ることが楽しみになる仕掛けづくり
- ②孤独・孤立の予防が、フレイルやMCI（軽度認知症）の予防につながる
- ③民生委員や町内会等、地域のプレイヤーとの密な連携

● キーワード
高齢者/フレイル
予防/居場所/
イベント

1 取組の背景と目的

◆対象者が抱える課題

- 当該地区は75歳以上が182世帯、独居が18名であり、日中一人になるそれ以下の年齢方もいる。近隣町会にもシニア2300世帯のうち約15%が独居である。
- このような状況に加えて、高齢者の外出の機会が減っていることもあり、地域の高齢者の孤独化がますます進んでいる。このため、高齢者がフレイルやMCIに陥るリスクが増えている。

◆取組を始めるに至った経緯等

- サロン開設当初は約20名の高齢者が参加していたが、年月が過ぎるとともに亡くなられる方、施設に入所する方等で参加人数が減りつつあった。また、独居の方や外出機会が減り孤立している方も少なからず存在していることが分かっている。
- このような高齢者が当サロンに通うことで、孤独状態から脱することができ、「地域高齢者の孤独・孤立」という地域課題の解決に少しでも貢献できると考えた。

◆取組の目的

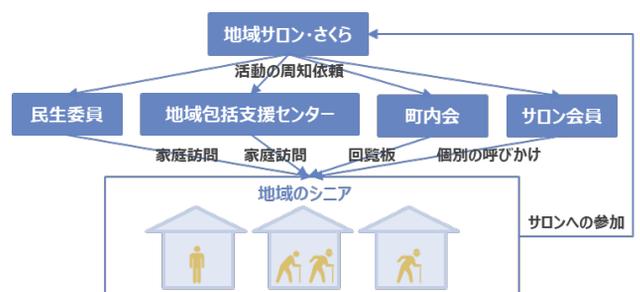
- これまでの活動は「フレイル予防」及び「MCI予防」を主な目的としていたが、本事業では、高齢者が継続的にサロンに通うことで、少しでも孤独・孤立状態から脱することにつながりたいと考え、参加者が楽しみながら参加できるサロンとすることを目的として実施することとした。

● イベントの詳細は以下の通り。

- 8月 カラーサンドで植物を育てよう/一日限りのまったり井戸端カフェ
- 9月 ダンス講師による踊り（炭坑節/ダンシングQueen）
- 10月 理学療法士によるロコモ体操
- 11月 ハワイアンバンド生演奏
- 12月 通常の営業
- 1月 バス旅（日帰り房総方面いちご狩り・花摘み・アクアライン）

連携先との関わりと連携方法

- サロンへの参加を促すため、イベントの周知等を関係者と連携の上で行った。
- 具体的には、民生委員や地域包括支援センターが地域の高齢者の自宅へ訪問する際にサロンの意義や活動、日ごろ使っている認知症予防のための問題用紙等を手渡しいただいた。また、町内会の力を借りて回覧板でサロンに関するチラシを地域住民に周知することもできた。
- このような関係者との連携による周知に加えて、当サロンの会員にも近所に住む高齢者への声掛けを行ってもらった。



2 取組内容

具体的な取組の内容及び特徴

- これまでの取組である、認知症予防の情報共有、体操・コグニサイズ（認知症予防運動のことで、軽い運動をしながら頭で計算やしりとり等を行う）や問題演習等の取組に加えて、誰でも参加しやすい楽しみがあるサロンとするため、ほぼ毎月のペースでイベントを企画・開催した。
- イベントは町内会でチラシを回覧する、掲示板で知らせる等、一人でも多くの高齢者に情報が届くよう、関係者（民生委員、町内会長、地域包括支援センター等）と連携して周知を徹底した。



3 取組の成果

◆日常生活環境における予防効果

- 各イベントに参加した高齢者からは以下のような声を聞いており、サロンへの参加意欲が高まり、本事業が孤独・孤立の予防に寄与したと考える。

<イベントやサロンに参加した人の声>

- ✓「ダンスは老骨にムチ打って頑張りました、楽しかった」
- ✓「炭坑節楽しかった、また皆で踊りたい」
- ✓「ロコモ体操コピーいただいたので家でもやりたい」
- ✓「ハワイアン皆で歌えて楽しかった」
- ✓「飛び入りで歌わせてもらい、皆さんに拍手を貰えて嬉しかった」
- ✓「参加の方々とお話しできることが楽しい」
- ✓「皆さんについていけないことが多いが周りの方がやさしく教えてくれる」

◆つながりの醸成

- イベントを通じて当サロンへ新規加入者が9名、再加入者が3名となり、地域の高齢者同士のつながりが醸成され、孤独・孤立の予防に資する結果となった。
- ①カラーサンドを使って植物を育てよう（2名の新規参加者あり）
- ②理学療法士によるロコモ体操（90歳過ぎの高齢者にもとても好評）
- ③ダンス講師による炭坑節を踊ろう
- ④ハワイアンバンド生演奏（飛び入りで歌われる方も出現）50数名の参加者あり
- ⑤バス旅行（19名の参加者（うち新規加入者9名）あり。「知り合いもないので寝ていればいいわ」と参加された方が、「とても楽しくて寝ている場合じゃない、来月からサロンにぜひ参加させてほしい」と言っていた。



◆連携による効果

- 民生委員、地域包括支援センター、町内会と連携しサロンの取組やイベントに関する周知を行うことで、多くの高齢者に参加いただき、新規加入者・再加入者合わせて11名の高齢者が新たに当サロンの会員として加わった。
- サロンに通う高齢者が増えることで、家にひきこもりがちになることを防ぐことができ、ひいてはフレイルやMCIの予防にもつながると考える。

4 取組において工夫した点

◆取組において直面した課題

- 個人情報観点から、地域包括支援センターが有している地域で孤独・孤立を感じている世帯の情報の共有はなかったため、個人として個別にそのような世帯を訪問し、サロンの活動をPRすることはできなかった。

◆解決策

- 個人情報保護のため、今後も地域包括支援センターから孤独・孤立を感じている世帯の情報の共有は見込めないが、サロンの活動自体を外向けにPRすることは可能であるため、引き続き関係者と連携した周知を図っていく。

5 今後の展開

◆今後の課題

- 新規加入者や再加入者が継続してサロンに通う意欲を持てるよう、細かなサポートをしつつ、魅力あるサロンとなるよう、引き続き参加者が楽しめるような魅力あるイベントを企画していく必要がある。災害時も近隣同士のつながりは重要となるため、サロンを通じて仲間づくりの大切さを伝えていきたい。

◆取組の継続方法

- 個人でやっていることもあり、関係者の支えが無ければ取組を継続することはできないと考えている。地域の高齢者にとって、サロンに集まり仲間を作り、楽しい時間を過ごすことは、フレイルやMCIのみならず、孤独・孤立対策に対する予防という観点からも重要である。今後も関係者と密に連携しつつ、一緒に取り組んでくれる仲間を増やしていくことが必要だと考えている。

◆他団体への波及可能性

- 当サロンのように小さなサロンでも、利用者にとって魅力あるイベントを企画し、関係者と連携して取組むことができれば、その場に集まってくれる人は必ずいる。どのような団体でも、志があれば、孤独・孤立を感じている人に届く支援はできると確信している。

●団体概要

地域サロン・さくら

表：伊藤玲子/設立：2017年/スタッフ1名

所在地：千葉県柏市中原2丁目19-2-201

主な事業：フレイル予防・認知症（MCI）予防等

●メッセージ

- 大きな団体でなくても、地域で孤独・孤立を感じている人のために動くことはできます。重要なことは、想いを持つこと、その想いに共感してくれる人を見つけ、一緒に取り組むことだと思えます。小さな目標でもいいので、想いがある人は、まずは行動してみることをお勧めします。

あいりん地区単身高齢者のつながりづくり・支援者間のネットワークづくり ハレトケの会（大阪府大阪市）

●本事業のポイント

- ①地域の憩いの場である萩小の森利用者のつながりづくりをおこなう
- ②福祉のまちとなってきた釜ヶ崎で支援者のネットワークを強化する

●キーワード

単身高齢者/福祉の
ネットワーク/地域の中
の役割づくり

1 取組の背景と目的

◆対象者が抱える課題

釜ヶ崎では、経済状況の変化から2000年前後には約3,000人が路上生活を余儀なくされたといわれ、その後高齢となり生活保護受給に移行された方も多いが、日々することがなく人とのつながりからも孤立してしまうケースが散見される。

単身で暮らす方が多く、孤立した生活は孤独死へと繋がっている。このような地域で、わたしたちは2013年から月に2回ほど定期的に体操や瞑想の会や落語会などのイベントを行ってきた（新型コロナ流行中は休止）。

◆取組を始めるに至った経緯等

日雇労働者の寄場であった「あいりん総合センター」が、建て替えのために2019年に閉鎖されてセンターを日中滞在していた人たちの居場所がなくなり、萩之茶屋小学校の跡地に開設された「萩小の森」に地域の人々が集まるようになった。

萩小の森利用者がよりつながっていける取組をしたいと思い、今回の事業を始めるに至った。

支援者間のネットワークづくりは、地域には野宿者支援団体、困窮者支援団体、介護・福祉事業者などが多くあり、小さな居場所も各所で運営されている。社会課題が山積し、民間の社会資源が多く集まる地域だが、各団体をむすぶネットワークをより密にして、お互いの活動を知り合い、日常的な関わりの中で生活上の課題があった時に、その後の適切な支援に結び付けられる体制づくりに取り組んだ。

2 取組内容

◆具体的取組内容

- 1) 福祉支援者の集まりでの意見交換
- 2) 萩小の森でのコーヒーを飲みながらお話する活動（ひよんの実珈琲倶楽部、萩之茶屋地域周辺まちづくり合同会社との連携事業）
- 3) にしなりベンチづくりプロジェクトとの協働作業
- 4) 瞑想と体操の会
- 5) 年末の落語会と年越しそば



◆連携先との関わり

連携先であるにしなりベンチプロジェクトとは、協働しながらベンチづくりに取り組んだ。萩小の森の設備を作ることを検討し、制作に向けての準備を始めることができた。コーヒー焙煎と提供で協働したひよんの実コーヒーさんとは、萩小の森でのコーヒー提供、お茶会で連携して実施することができた。

「福祉支援者の集まり参加団体」

- ・NPO法人バリアフリーつばさ
- ・認定NPO法人釜ヶ崎支援機構
- ・釜ヶ崎ディアコニアセンター 喜望の家
- ・釜ヶ崎キリスト教協友会
- ・釜ヶ崎反失業連絡会
- ・NPO法人ジョイフルさつき
- ・野宿者ネットワーク
- ・わたなべ往診歯科
- ・労働者協同組合ワークズコープ
- ・認定NPO法人こどもの里
- ・ハレトケの会

◆連携方法

地域の支援者のネットワークづくりでは、「福祉支援者の集まり」において、それぞれの団体が「孤独・孤立」に対してどのような取組をしているかを会議で共有してもらった。



3 取組の成果

◆日常生活環境での連携の必要性

- ・福祉支援者の集まりの会議時（11月1日19時ごろ）に、「今日寝る場所がないが、緊急宿泊をできる場所を教えてください」と、通りがかりに偶然来所した方がいた。メンバーが緊急宿泊所である「今宮シェルター」に連絡して、その日の緊急宿泊を受け入れてもらい、夕食も準備してもらった。もう何日か食事をしてないということだった。翌日、生活相談窓口に繋いでもらえることとなった。
- ・日常的な関わりから、いつ、緊急的な相談が持ち込まれるかわからない。日ごろ、会議や活動に関わる中でネットワークが作られて、緊急時にも連携することができる例だと思う。



第54回釜ヶ崎越冬闘争での炊き出し。釜ヶ崎での諸団体の連携の原点である越冬闘争は54年目を迎えた。

◆連携による効果-1

- ・活動拠点の「萩小の森」で社会連帯ワーカーズひよんの実と協働して、コーヒー焙煎や、コーヒー提供を行った。（実施回数：8回 述べ参加人数：約220人）
- ・ひよんの実珈琲は、「社会連帯ワーカーズ」という、小さな仕事づくりを通じて社会の中に居場所や役割を作り出す活動をしており、萩小の森に集まる人々を対象にして、コーヒー焙煎活動への参加を呼び掛けた。
- ・月に何回かのコーヒー提供事業は定着してきており、コーヒーを飲みながらお話しする機会を心待ちにしている人も何人かできてきた。
- ・連携によって、萩小の森での取組を地域の他の取組に広げることができ、より継続的なつながりをつくり、居場所や地域での役割づくりにつなげることができた。



◆連携による効果-2

- ・西成区で地域の高齢男性が中心となってベンチを作成して設置しているベンチプロジェクトさんと協働を行った。地域内に設置するベンチを作成した。建築現場で働いてきた人が集まっている地域のため、大工仕事得意な人も多い。ベンチづくりの技能がある団体と連携することで作業を進めることができた。



4 今後の展開

◆今後の課題

今年度は、はじめての萩小の森での取組であったため、手探りでの活動となる部分がおおかった。結果的に活動が端緒についたところで事業期間が終了してしまった感があるが、コーヒーを淹れる活動は、広場利用者にも認知されてきつつあり、今後ベンチプロジェクトの協働作業を進めていく中で、いっしょに活動できる仲間を増やしていき、取組を継続させたい。

◆取組の継続方法

支援対象者とつながりつづけるためには信頼関係の醸成が必須でありそのためには時間をかけて継続的な取組が必要となる。

◆他団体への波及可能性

今回、支援者ネットワークづくりの取組の中心となった「福祉支援者の集まり」は、組織ではなく、ゆるやかな横のつながりを作るために月1回程度の集まりを持っている。現在11の団体が主に会議に出てきているが、今後はもっと他の団体の参加も呼びかけていくことになっている。一つの主眼が、新今宮駅前のあいりん総合センター建て替え跡地に、大阪市の福祉の拠点となる施設を作るための要望を話し合っているが、福祉的な課題が多い地域であり、対象者のほとんどが、社会的に「孤独・孤立」の状態であると推測されるため、地域福祉のための施設ができて、ワンストップ相談窓口ができるなど、「孤独・孤立」対策の拠点となってほしいという希望がある。

●団体概要

ハレトケの会
代表：小手川望/設立：2013年/スタッフ：3名
所在地：大阪市西成区出城3丁目2-1 1-203
主な事業：瞑想と体操の会、萩小の森お茶会

●メッセージ

・今回の事業に参加して、釜ヶ崎は政策的に日雇労働者のまちとして成立し、「孤独・孤立」の問題が先鋭的に集まっているまちだと改めて感じた。その分、取組の歴史が長く、知見が蓄積されているとも思う。全国の団体の活動内容を知れたことも、各地の課題に触れられてよかった。このような取組が必要ない社会が実現することを願いながら活動を行いたい。

多様な仕掛け

まちっこ家族、じっちゃん、ばあちゃん 三世代見守り愛活動

NPO法人 街の家族（神奈川県横浜市）

●本事業のポイント

- ①地域の変化（高年齢化⇒新世代）
- ②制度の狭間に落ちる人々の増加（大きな課題）
- ③必要な協働へ

●キーワード

多世代/地域づくり/
食事提供

1 取組の背景と目的

◆対象者が抱える課題

子育て世代増加（転入）・独居老人の増加・不登校児童の増加のなか、保育未満、介護未満等々【大きな課題】、制度の狭間に落ちてしまう人々。

◆取組を始めるに至った経緯等

2012年、宅地開発後約60年の空家でコミュニティの家族（以下【街】）を開設
新型コけ期（2020-22）の活動休止の対応期コけ元年、NPO化（2020.8）コけ後に向けた充実への計画と活動の再開。（～2022）

今迄に築いた活動の場での繋がりベースの上に、大きな課題に向き合う地域ぐるみの事業、即ち、総合化への第1年目、チームワーク対応を進めました。

◆取組の目的

【街】に集う地域利用者（主に未就学児の家庭）とそのOBの多くの地域皆さま、地域メディアや助成金交流会、活動紹介登壇等を通して色々な繋がり積み上げ。

増加が目立つ転入家庭の未就学児家庭の子育てを三世代でサポート（三世代交流）

地域生活の中心世代は確実に次の世代に入れ替わっている。



取組の様子

2 取組内容

◆具体的取組内容と特徴

- 普通の家庭の様に家庭の三つの要素、食事の団欒、幼児期、就学こども期、これらへの取組を地域ワイドに重ねる3つのチームワーク事業の展開

①チームワーク<食>

- シニア世代が中心となり進める。
- 家庭食メニューの組立、食材の調達・寄付食材の活用。
- 大家族の雰囲気と和気藹々のお昼ごはんを通して三世代交流の輪を広げる。

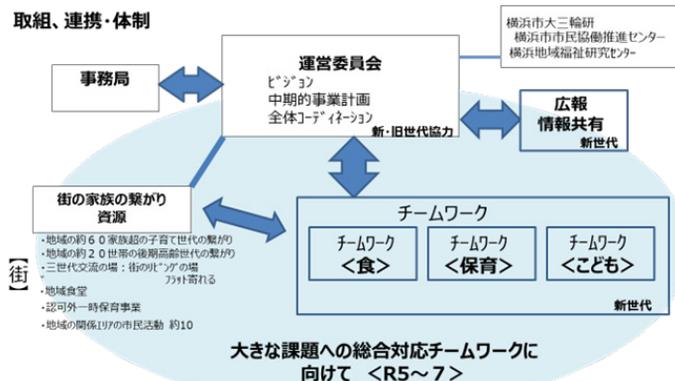
①チームワーク<保育>

- 地域の子育て世代（新住民）で力をあわせ、地域保育の支え合いを組み立てる。
- シニア世代（旧&転入新住民）が傍で支える。
- 妊娠から未就学世代を主な対象に、妊娠～保育期の母子の健康、親子団欒、性教育等、保育期の地域の支え合い交流を進める。

①チームワーク<こども>

- 登校困難等悩みを持つ方々のネットワークづくり⇒交流会の開催（月1回）
- 地域関連団体の力合わせを推進、こどもサードスペースの機能を地域の協力での実現に向け、行動起こし。
- ケアアップ、地域関連団体の力合わせでWS、交流会のオーガナイズ

◆連携先との関わり



関係機関の連携図

3 取組の成果

◆チームワーク<食>

- 子育て世代多くのこども達は小学生世代、学校(PTA)・地元スポーツチームなど、地域の繋がりを介し地元2農家さんから野菜を、又、広報・情報共有介し多量の玄米を、主に新世代の活躍で基本食材の縦の繋がりが充実しました。
- “みんなの食事”の準備の面では、シニアメンバーによる交流会(月1回開催)で、新たに3名の地域シニアで充実しました。
- 利用家族数では前年比30%増加、又、<保育><こども>を合わせ、月1~2回の外部団体の見学を受け入れました。3チームによる活動の土台として、地域の繋がりを<食>を介して支える姿へと着実に進みました。

◆チームワーク<保育>

- 地域の子育関係団体・施設の連絡網(街の家族を含め7団体との連携や妊娠・出産期の健康等、繋がりがテーマごとの助産師、歯科医師、胎教マッサージ師、保育師等のエキスパートパートナーネットワークへ、地域保育の姿が見えてきました。

◆チームワーク<こども>

- 事業者間交流ネットワークの拡大 団体間の共働では、地域三団体(横浜市鴨志田地域ケアプラザ、NPO法人街の家族、NPO法人あおば学校支援ネットワーク)の団体の共同企画の具体化(*)しました。
*テーマ: 発達特性のある子どもとどのように向き合う?(全2回、R6.2.29、3.15) 受託期間から外れますが、受託期間の活動の成果です。

4 取組において工夫した点

◆取組において直面した課題

地域ぐるみのチームワークでは、新世代と旧世代の地縁組織との連携対応が重要です。

◆解決策

月報(カンパニー)、行事チラシ、対面等、リアルな方法で地縁の運営世代と新世代住民による状況共有(持参&対話)業務が重要、一方、新世代へは、チームワークの毎日の状況をSNS(FB, Instagram)拡散・共有。地域の世代間協力に向けた広報・情報共有業務域の新世代、宅地開発当初からの旧世代のチームワークを大事にしました。

5 今後の展開

◆今後の課題

- 居住域の空家活用は色々な面で生活の場での生活福祉サービス提供の最適の場です。一方、現在の活動場所: 築後約60年、賃貸後12年を経過、老朽化でNext Step対応の時期となっています。
- 築き上げた人材、地域の繋がり、豊富な活動実績を総動員、サービス毎の提供方式の選択特徴に合わせた場の分散対応等々。いずれにしても、地域の空家資源、集会場、市民利用施設等、そして
- サービス提供の地域の場の費用の負担面で地域的(空家資源の活用)、行政的、NPO等サービスの提供者等の関係主体の全体的な協調・協働対応が重要な課題と考えています。

◆取組の継続方法

- <食>、<保育>、<こども>の3チームワークの事業は家族的な地域の繋がりを支える不可欠な3要素です。
- サービス対象が比較的はっきりしている<保育>、<こども>は一か所での受け止めは困難で<こども>で2~3中学校区、<保育>では小学校区~中学校区の範囲での受け支えが必要で連携が不可欠で、今年度の延長線上で近隣地域の関係団体との交流・連携を更に充実を図ります。
- 一方<食>は、居住域およそ半径500mの生活圏ほぼ奈良小学校区に重なる地域、前述の<保育>、<こども>を支える土台となる三世代による生活域での家族的な地域のつながりの源流となる事業です。
- 3チームが日常的に一緒になれる状況<街のリビング&それを支えるみんなの台所>の存在が不可欠と位置づけています。

◆他団体への波及可能性

- 普段の活動の状況共有が大切です。「愛するこのまちの将来のために空き家を活かしたら・・・」と長年思い続けていらしたオーナーさんの想い。活動開始以来、年1回以上活動と運営状況の共有に勤めました。現在も続いています。新運営メンバーの顔合わせ等、その時の状況に合わせリアルな打ち合わせも。

●団体概要

NPO法人街の家族

代表: 押久保 美佐子/設立: 2020年(任意2012年)

スタッフ: 8名(定期)、11名(不定期)

所在地: 神奈川県横浜市青葉区奈良町1566-332

主な事業: 子育て支援、居場所、多世代交流 等

●メッセージ

- 私達は、大家族的な緩い繋がりをまちづくりに重ねる活動……“要”は“人” 地域の活動家と地域での就労環境の充実 そして 近住の<場>の実現と思います。子育てのしやすいまちへ、シニアが元気なまちへ、3世代が普段着で関わり合い過ごす日常、私達の願い♥

「気づきの和」普及啓発のための通信発行・全戸配布プロジェクト

特定非営利活動法人 森ノオト（神奈川県横浜市）

●本事業のポイント

- ①地域の「いい話」を届ける超ローカルメディアを発行
- ②どんな家庭にも届ける全戸配布
- ③読者の「いい話」をシェアできる双方向な仕掛け

●キーワード

見守り/気づき/地域参加/情報発信及び共有

1 取組の背景と目的

◆対象者が抱える課題

各自治会町内会やまちづくり活動が活発に行われているが、地域行事等の情報が届かない、届いても参加するハードルが高い、接点が全くないという層も多い。



◆取組を始めるに至った経緯等

2019年に立ち上がった地域の福祉ネットワーク「気づきの和連絡会」。地域の心あたたまるエピソードを紹介したり、事例を紹介している。この連絡会で共有されていることを地域住民に広く知ってもらうための広報媒体を検討したことがきっかけ。

◆取組の目的

通信を読むことで、「見守り、見守られている実感」を持つ住民を増やしたい。また自分自身の「あたたかな気づき」をシェアできる双方向な仕掛けで、気軽に地域参加の一步を踏み出せることを目的としている。

2 取組内容

◆具体的取組内容と特徴

気づきの和通信「ごきげん」の発行（年度内2回）

◎どんな家庭にも届ける全戸配布

中里北部連合町内会エリア（約6,500世帯）への全戸配布を地域の新聞販売店と協力して実施。自治会・町内会に加盟していなくても情報が届くような仕組みに。

◎地域参加のハードルを下げる双方向性

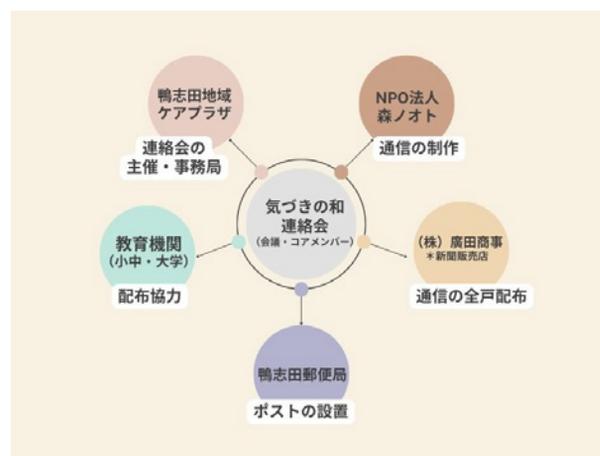
自分自身のあたたかな気づきを記入する「ごきげんカード」を投函できるポストを設置。見守り、見守られる地域に住んでいる一員として、気軽な地域参加を促した。

◆連携先との関わり

・すでに活動している気づきの和連絡会を土台とした体制で動いた。
通信の制作にあたっては情報発信を得意とするNPO（当団体）。配布にあたっては、地域の新聞販売店。投函ポストは郵便局が担うなど、それぞれの強みを活かした連携ができた。

◆連携方法

・3か月に一度の連絡会、コアメンバーでの月1回程度の打合せを実施し、団体を越えた情報共有を行った。



気づきの和連絡会には、同連合町内会エリアの、3小学校、2中学校、2大学の校長やPTA代表、民生委員や行政、NPO、企業など、さまざま立場の人が集まり、各現場で起きていることを共有している。

3 取組の成果

◆地域と接点のない層への情報発信

・地域行事や地域活動にハードルを感じている、接点がないという層にも、地域に見守りの目線があることを、紙面を通じて情報を届けることができた。継続的に発行していくことで福祉文化を醸成したい。



◆参加もできる双方向性の仕掛け

・自分自身が感じる「心があたままるエピソード」を投函できるポストを設置。投函数はまだ少ないが、情報を受け取るだけでなく、自分が主体的に地域と接点を持つ仕掛けをつくることができた。この仕組みを継続することで、地域への関わりしるを広げたい。



◆連携による効果

・気づきの和連絡会という既存の活動が基盤となり、1つの団体や機関ではできない多角的なアプローチで取り組むことができた。また通信をキーとして、多世代の各プレイヤーが「見守り、見守られる」視点の情報共有を定期的に行える体制がつけられた。

4 取組において工夫した点

◆取組において直面した課題

- ①通信の全戸配布を目標としているが、新聞販売店でカバーできないエリアもあった。
- ②地域の方からの気づきの投函がまだ数が20～30程度と目標からは遠い。

◆解決策

- ①小中学校に協力を依頼し、全戸配布とは別に全生徒配布を実施。子どもたち経由だと読んでもらえる確率も高くなった。
- ②郵便局のみにしかポストがなく投函できる時間帯が限られていることから、地域のマルシェで出張でポストを設置し、多世代からの投函を集めることができた。

5 今後の展開

◆今後の課題

・今年度は気づきの和連絡会の広報媒体として「ごきげん」を発行することができたことが大きな成果であった。来年度は継続発行することで、「見守り、見守られる」地域の福祉文化を根付かせていきたい。そのため、より地域の人が気づきを投函しやすいような工夫を加えたい。

◆取組の継続方法

- ・本取組を来年度以降も継続するための資金調達の方法は、他助成へ申請中。
- ・気づきの和連絡会の活動を継ぎ、各参加団体と情報共有をより密にする。

◆取組の波及可能性

・通信の発行は、近隣エリアから「どのような体制でやっているのか」という問合せや取材を複数受けた。他エリアでも同様に、地域との接点のない層への情報発信に課題があることがわかり、本取組の仕組みを展開できないかと検討している。

●団体概要

特定非営利活動法人森ノオト

代表：北原まどか/設立：2009年/スタッフ：20名

所在地：神奈川県横浜市青葉区鴨志田町818-3

主な事業：メディア事業/コミュニティデザイン事業

●メッセージ

・今回の取組を通して、地域の中で見張りや監視ではない、あたたかな目線を育む一つの方法として可能性を感じた。本取組実施の際には、情報発信を担うプレイヤーがいるのが鍵となると感じる。